
あの時…

佐井村伊佐太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの時…

【Nコード】

N0945N

【作者名】

佐井村伊佐太郎

【あらすじ】

僕は殺した。優しかった、「あの彼女」を…

？それが全てだった：

？彼女を僕は殺した。全ては僕が悪い。

？誰にでも優しく、朗らかにほほえみ、皆から愛されていた彼女。

？しかし、その彼女はもういない。

？僕が殺した：

？僕と彼女は、高校一年生の頃知り合った。

？文化祭の日、一緒にまわる筈だった友人が風邪で来れなくなった。

？どうしようかと悩んだが、僕は1人でまわる事にした。

？他に一緒にまわるような友人は、思い付かなかった。

？何をする訳でもなく、ただぶらぶらした。

？少しも楽しいとは思わなかった。でも、帰る気にもならなかった。

？そんな時に、彼女と出会った。

？美しかった。

？全身から溢れ出る優しさが、彼女を輝せているようだった。

？彼女は辺りを見回し、瞳には不安そうな色を浮かべていた。

？僕は彼女に声をかけた。

？彼女は友人とはぐれたそうだった。一緒に探そうかとも言ったが、彼女はそれを断り代わりに、一緒にまわってくれないかと頼んで来た。

？僕は承諾した、断る理由もなかったから：

？彼女と居るのは、それなりに居心地も良かった。

？

？それから僕達は、共に、同じ時間を過ごした。

？やがて僕は、ごく自然に、「恋人」という関係になった。

？周りの友人は、皆僕達を祝福した。友人と言っても、僕の友人は数えるほどで、殆どが彼女の友人だった。

？彼女の友人は皆が皆、僕があまり関わった事がないような、気持ちの良い者ばかりだった。

？類は友を呼ぶ、とはこういう事なのか。などと思ったりもしたものだ。

？

？満たされた時だった。

？

？しかし、どんなものにも終わりは訪れる。

？僕達が無事進級し、2年生になって間もない頃だ。

？彼女は寝込んだ。

？2、3日が1、2週間に。そして入院へと、あつという間に、状況は目まぐるしく変わっていった。

？僕は心配した。彼女が入院してからは、見舞いにも行った。行っただんだ：

？彼女への見舞いの間隔は、2日に一度、4、5日に一度、1週間に一度とどんどん長くなっていった。

？別れを切り出したのは、彼女が殆ど学校に来れなくなってから、1ヶ月と半月程過ぎた頃だった。

？彼女は嫌だと言った、別れたくないと言きそうになりながら言った。

？僕は驚いた。僕が彼女にとって、それ程の存在とは思っていなかったし、彼女がこんな「我儘」を言うとは思っていなかったのだ。

？彼女がこれまで、僕に一度だって我儘を言った事なんて、なかったから。

？

？僕は彼女の、たった一度の「我儘」さえ聞かなかった。

？ 一方的に別れを告げた後、僕は呼び止める声を無視し、病室を飛び出した。

？

？ その後、僕は見舞いには行かなかった。

？ その代わりというように、彼女から僕のもとには、毎日のように電話がかかってきた。

？ 最初こそでて話していたが、そのうちに電話を取る事さえしなくなった。

？

？ 本当に面倒だと思った。

？ 鬱陶しかった。

？ そしてその日はやって来た。

？ 目が覚めたのは、声が聞こえたからだ。

？ 起きて、ねえ起きてよ…

？ 暗闇で何も見えやしない。

？ ただその中で、彼女の手にある出刃包丁だけが、月のひかりを反射し、暗闇にぼんやりと浮かんでいた。

？ 何故、どうやって入って来たのか。

？ まだ彼女に、この部屋の合鍵を渡したままだった事を思い出した。

？ だんだん目が慣れてくる。

？ 病室から抜け出して来た彼女は、病院の寝巻き姿だった。

？ その目には涙が浮かんでいた。

？ 涙はやがて溢れ出す。

？ 別れるなんて嫌だよ…

？ 僕は彼女にきっぱりと告げる。

？ 君とはもうおしまいだ、と…

？ じゃあ仕方ないね、そう言うと彼女は笑った。涙を流しながら笑

う姿は、不気味に感じられた。

？その時僕は、はじめて恐怖を感じた。

？

？だがもう遅い。

「バイバイ」

？彼女が抱き合うように、僕の懷に潜る。

？腹が熱い。痛い。血が吹き出る。

？刃が肉から抜かれる。

？返り血で赤く染まった服のまま、彼女は笑っていた。

？バイバイ、またそう言うと、彼女は帰って行った。

？

？僕は死ぬのだろうか？

？彼女が帰った部屋の中、静まりかえった部屋の中でふと思う。

？まだまだ腹は焼けるように熱くて痛い。血も吹き出ている。

？きっと死ぬ。

？そう思った。

？そして…

？そして彼女を殺してしまった。？

？そう思った…

？あの、優しく、朗らかにほほえみ、皆から愛されていた彼女を僕は殺した。

？もう「あの彼女」は死んでしまった。

？僕が悪い。

？僕が殺した。

？

？何を間違えた？どこで間違えた？

？あの日、別れを切り出した事だろうか。たった一度の我儘さえ聞いてやれなかった事だろうか。

?それとも…

?それとも、僕達が出会った、「あの時」が間違いだったのだろうか…

?答えはでない、分からない…

?腹が熱い、痛い…

?もう考えるだけの時間も残されてはいないだろう…

?血が吹き出ている…

?熱い、痛い、苦しい、苦しい…

?これが…

?これが、罰なのだろうか?

?彼女を殺した僕への、罰なのだろうか…

?答えはでない…

?

?熱い、痛い、苦しい…

?

?

(後書き)

お読み頂きありがとうございますm () m
いつもは結構明るいのを書いてるので、少しシリアスに見
ました(ちゃんとなったかな? w)

コメントなど頂けると大変嬉しいです。よろしく願いますm
() m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0945n/>

あの時…

2010年10月13日05時55分発行